

横浜市長

中田 宏

Nakada Hiroshi

1964年神奈川県横浜市出身。89年青山学院大学経済学部卒業後、財団法人松下政経塾に入塾。93年から衆議院議員を3期務める。2002年、37歳で横浜市長に当選、現在2期目。05年、世界経済フォーラムから「Young Global Leader（若き国際的指導者）」に選ばれる。近著に『中田主義 僕の見方、考え方』（講談社）、『ナカダのナゼダ』（共著、小学館）など。



photos by Otsuka Masataka

「積み重ねてきた日本の貢献を日本人自身が評価すべき」

1859年の開港により、日本の国際化が始まった地が横浜であり、私をはじめ市民の皆が国際都市であると自負しています。ですから、5月に第4回アフリカ開発会議（TICAD）がこの横浜で開催されることは、ある意味、宿命だと思っています。経済的なつながりを含めいろいろな形でアジア諸国と交流を深めてきた今、日本にとって重要なアフリカとの交流も、同じように横浜から出発するという意識で、準備を進めています。

特に5月は徹底して横浜をアフリカ色に染めようと考えています。というのは、アフリカは元気に発展しているということも含め、私たちはアフリカのことをあまりに知らなさすぎると思うのです。それは情報が伝わってこないからですが、知らないが故に、アフリカに対するイメージは、野生動植物がたくさん生息している、というような画一的なものでしかありません。作物が十分に育たず飢餓のアフリカがあったり、HIV／エイズがまん延するアフリカの姿がある一方で、都市化や民主化が進むアフリカがあるのです。

「今どの国で何が起きているか」をすべての国についてすぐ学ぶことは難しいとしても、「広大なアフリカには、実に多様な暮らしや諸問題がある」ということを、TICAD を機に学んでいくべきだと思います。最近では、資源の視点から世界がアフリカに注目していますが、必要に迫られて築く関係というのは相手から懐疑的にとらえられ、逆に言えば、必要に迫られなければ学び合わない関係になってしまっているということでしょう。直接的な利害とは別に、

日本にとってアフリカは重要で魅力的な地域であると思います。

10年ほど前になりますが、国際会議の帰途ガーナに立ち寄り、黄熱病の研究に身をささげた野口英世博士の研究室があった病院や、日本の援助現場などを視察しました。青年海外協力隊の人たちとも話しましたが、本当に彼らには頭が下がりました。首都から2日もかかり、連絡手段が無線機しかないような地域に日本人がたった一人で入り込んで活動しているんですから。

多くの人が国際協力に関心を持っていると思いますが、さらに一歩踏み出す“きっかけ”がないんですよね。私の場合はガーナに行ったことがまさにきっかけとなりました。そのとき、帰国した協力隊員の就職口が少ないという現状を知り、彼らのように日本の代表として世界で活躍する人を大切にする社会であるべきだという問題意識を持ちました。横浜市では、今、協力隊経験者のように根性もあり語学もでき多様な文化も知っている経験豊かな人材を積極的に採用しています。

国際協力というと、日本人のほとんどがお金ばかりで人は出していないと思い込んでいます。しかしJICAを通して、協力隊を含め本当に多くの人が現地に溶け込んで仕事をしています。そうして積み重ねてきた日本への信頼を私たちは誇りにすべきだと思います。その意味で、10月に生まれ変わる新JICAへの期待も込め、これまで行ってきた国際協力を、海外からだけではなく、もっと日本社会の中で自分たちでも評価していくことが大切だと思います。

魅力あるアフリカとの交流を横浜から



中田 宏

横浜市長

世界の繁栄と安定に重要なアフリカの未来を議論する「第4回アフリカ開発会議（TICAD）」が5月28～30日、横浜で開催される。来年、開港150周年を迎える横浜は、今年を「地球の中で横浜を考える年」と位置付け、アフリカが持つ多様性や力強さに接しつつ、国際都市としての価値をさらに高めるべく、準備を進めている。

中田宏・横浜市長は、約10年前にガーナを訪れてから、アフリカや国際協力の重要性を強く認識する。TICADは1993年に日本が提唱して始まり、今にわかに「アフリカ」と言っているのではない。もっとアフリカに関心を持つというエネルギーを充満させたい。そう力説する中田市長に、TICAD開催に向けた意気込みを聞いた。

（続きは裏ページへ）